

昭和三十一年度における国語学界の展望

言語生活

芳賀 綏

筆者は、昨年度の「言語生活」部門の展望を結ぶに当って、言語生活ないし言語技術の研究が、ようやく、学的秩序をととのえてよい時期に到達したのではないかと述べ、そのためには、更に、根本的な検討・論議が重ねられることの必要を感じる旨を記しておいた。

ところが、たまたま、ほとんど時を同じくして発行された雑誌「言語生活」十月号は、「言語技術の再検討」を特集し、ややおくれで出た「ことばの働き」(講座・現代国語学——筑摩書房)には、大久保忠利氏の「ことばの技術——戦後日本の「言語技術論」——」が収められるなど、少なくとも「言語技術」に関する限り、俄然、活潑な論議が公けにされるのを見るに至った。

「言語生活」十月号は、冒頭に、亀井孝・大久保忠利・森岡健二の三氏による座談会「言語技術をめぐって」をおく。——「言語技術学派」の外にある人として亀井氏の積極的な発言は、おそらくは同じく「学派」外の多くの人々が抱いているであろう疑問や批判を代弁する結果ともなっており、しばしば重要な見解が吐露された。「言語技術を説く人の技術をささえている学問か思想と

か、その根本での対決」を考え、言語技術家自身の間で論争の行われることを望む亀井氏の発言に刺戟されつつ、大久保・森岡両氏が、お互いの間の見解のちがいをかなり明らかにしたが、

人間関係を良くするか、客観的な真実をつかんで発表するとか、論理的な思考をするとか、考えかたの教育でなければならぬ。

とする点では各氏とも一致しながらも、「言語技術という名前を打たれたことさえ残念に思っている」森岡氏と、「(うそをつく、人をだますことをやっている人が)言語技術と名乗るところにうしろめたさを感じるほど言語技術ということには権威があると」する大久保氏との間に、主として「言語技術」という用語をめぐって見解の対立があり、言語技術研究者相互の間にも、なお議論と調整の余地が大いにあることを思わせた。——発表の場所がらもあって、多くの人の関心を「言語技術」に向けさせた点でも、この座談会の意義は少なくなかったと考えられる。

これより先、森岡氏には、「ことばの技術」の再吟味(「言語生活」五月号・六月号)があり、「言語技術」の本来とされるアメリカに、「ことばの技術」に当る用語があるかということ調査・検討し、あわせて、アメリカでの研究や教育の実状を紹介

している。このときすでに、森岡氏には、「技術」という命名について疑問のあることが表明されているが、研究の実状にふれたくだり、アメリカは、「ことばの技術」の研究が「こちらの社会的事情と密接に結びついていることは驚くほどで、学問と社会とのつながりは実に見事だと思われます」として「ことばの技術」に関する研究でも、こちらでは、丹念な実験的研究が大量に行われているようです」という報告が、殊に示唆深く、印象的であった。

前記、大久保氏の「ことばの技術——戦後日本の「言語技術」論」は、この、森岡氏の、「技術」という用語についての「問題提起をうけとめる」ところから出発し、戦後日本の「言語技術」という用語と考え方の歴史を丹念に追う。あわせて「ことばの技術」の日本での社会的必要性を説くのであるが、大久保氏の主張は、

ほんとうのことを言いたい書きたい人が、人々によく伝えるための表現のすべを持ってないということを悲しみ残念に思つて、なんとかして真実を吐露したいかたがたが、少しでもほんとうのことを人に伝え、人に受け取ってもらえるようなやりかたを身につけてもらいたい。……(前出、「言語生活」十月号)

「言語技術」というと、すぐにケイベツする人があるかも知れないが、これは間違っている。それは、言語技術をケイベツするほどの言語能力の持主になってからにしていただかなければならない。(「コトバの心理と技術」)

というところに集約されている。このあたりは、「言語技術」研

究者相互の間で、方法や術語などをめぐつての異論異説はさて置いて、まず最低限の一致を見ていなければならない出発点といふべきであらう。

先の「言語生活」十月号の特集には、また、大石初太郎氏の「問題・現代の話し方論」がある。同氏は、多くの「話し方論」を吟味して、(一)雄弁術・演芸話術・販売話術などの流れに属する「話術論」と、(二)アメリカのパブリック・スピーキングの系統につながる「言語技術論」とに大別し、その各々に検討を加えつつ、発達なお日の浅い「言語技術論」に対しては、(実験的方法などをふくめた)実証的研究・実態分析にもとづく理論構成の必要を説き、「もういっそう科学的に」という希望を提出している。

同様の希望は、前出「ことばの働き」の巻末にかかけられた、岩淵悦太郎・林大・大石初太郎・柴田武の四氏による座談会の中にも見えており、学問としての技術論を高めるための種々の着想が、各氏から発言されている。

二

さて、根本的な議論・考察の必要は「言語技術」にとどまらず、「言語生活」全般にわたっている。「言語生活」という用語の指すところはいかにも広く、内容は複雑であるが、言語生活の実態の研究について、その必要性の認識がようやく動かしがたいものとなった現在、実地の研究が有効に前進させられるためには、複雑な視野の中が、精緻に整理されていなければならない。

——その意味で、あたかも、時宜を得、筆者に人を得て、池上碩造氏の「言語生活の構造」(「ことばの働き」)が現れたことは、

よろこばしいことであつた。筆者一流の広い視野のうちに透徹した考察・分析が進められ、諸問題が相次いで提起されながら、明快なワク付けが与えられて行く。かつて時枝博士によつて大きな展望・見通しを与えられた言語生活の研究が、一段と具体化されるために、今後の研究者にとつてのこよなきスタートラインがここに引かれたということが言えるであらう。

池上氏の論は、言語生活の背後にある「言語意識」の問題をも視野におさめつつ、そこまで筆を及ぼしていないが、国立国語研究所研究報告「敬語と言語意識」（秀英出版）は、全国地方調査員の協力をも得て、地域社会の成員について、敬語行動ならびに敬語意識が、どのような社会的・心理的条件に支配されるかを探つたもの。二カ年にわたる大がかりな調査の成果だけに、ボウ大かつ精細な報告書となつたが、今後、活潑に行われるべき実態調査にとつて、重要なモデル・ケースともなるべきものである。

なお、「講座・現代国語学」は全三巻から成るが、そのうち、再度記した「ことばの働き」一巻が、ランガージュ一般に関する分野を受け持っている。従つて、この巻におさめるところの論文は、すべて、「言語生活」の核心なり周辺なり、あるいは基底なりにふれるのであるが、すでに紹介した二篇のほか、永野賢氏の「場面」とことばが重要な文献である。ランガージュについての考察に際して「場面」という術語を逸することはできないが、永野氏は、時枝国語学における「場面」論から出発して、「場面」に関する諸説を検討・整理しつつ、「場面」を主体の意識に還元する同氏独自の規定を明らかにする。更に、場面の要素の分析・場面とことばとの関係へと説き及ぶが、要を得た記述は、今後と

も、「場面」についての考察のために見逃すことのできない文章とならう。

同じ講座ものでも、純学術的なねらいの「現代国語学」とはおもむきをかえて、おなじみのNHK国語講座（宝文館）の刊行がある。この年度と同講座中には「私たちの言語生活」一巻があるが、内容は、言語技術的なものに重きをおいてある。ただ、池上碩造氏の「言葉の文化史」一篇だけがおもむきを異にし、言語生活の様式から言語意識の問題にまでわたつて歴史的な考察を加えたものである。

三

この分野で、多くの単行本の発刊に接したことは、おそらく前年度以上であつたらう。

西尾実氏の「日本人のことば」（岩波新書）は、例の「ことばブーム」の絶頂を形づくつた書物の一つ。「ことば」言語生活」という著者一流の使い方があるから、この書は、言いかえれば「日本人の言語生活」だ。日本人の言語生活の実態を考察することから発して、言語生活の改善と洗練、すぐれた言語文化の創造に至らうとする著者年来の主張は、学界・教育界にはすでになじみ深いものであるが、本書の刊行で、いっそう広く、大きな影響が多方面に及ぶことになつた。

一般への影響といへば、言語技術の指導書では、堀川直義・平井昌夫・大久保忠利氏等、ベテランの活躍がにぎやかで、たのしかった。堀川氏のは、十八番のところ、ベストセラーになつた「面接——どうしたら相手を説得できるか」（光文社カッパブツ

クス)。経験とカンから解放された「科学としての面接法」をバックボーンとしながら、具体的に精彩のある叙述で大いに読ませた。——平井氏は「魅力のある会話」「効果的な話し方」（いずれも講談社ミリオンプックス）の二書。前年の「上手な話し方」に相次ぐもので、いつもながら豊富で多彩な内容。——大久保氏の「話し方のしかた」（春秋社）も、例に変わらず氏一流の力作。

前出NHK国語講座「私たちの言語生活」でも、堀川直義（インタービューと商業面接）・上甲幹一（日常のあいさつと公式のあいさつ）・渋沢秀雄（電話、座談隨筆）・大久保忠利（正しい会議と討論のしかた）・下田将美（司会とラジオ話術）と、「言語技術派」ならびに「話術派」のベテランが、それぞれ得意のテーマをひっさげて筆をふるった。

研究の深化の必要は言うも更だが、ことにこの分野の問題は、すでに早くから大衆の関心をとらえており、その関心にうながされるので啓蒙的な仕事がおろそかにできないだけに、ここに並べたような、良心的で、あぶなげない内容のものが大量に普及していることはよるこぶべきである。

さて、それらよりは一步をしりぞいて研究書的色彩の濃いものでは、宇野義方・大石初太郎・森岡健二・上甲幹一氏等の労作が出そろった。

宇野氏の「言語技術」は、「新語国文学講座・第二巻」（黄鶴書房）中の一篇として書かれたもの。冒頭、言語技術に対する諸批判などをかえりみつつ、言語技術の必要について述べ、次いで「話し方の原則」をこの書の中心にすえる。とりあげるところは

アメリカのパブリック・スピーキングの場合と共通しているが、言語過程説的な考え方によってワク組みをし、体系立てを行なったところに特色が見られる。言語技術論の必要と可能が過程説の立場から考えられていたことは早くからのことであるが、具体的にこのような形での整理が行なわれたのは、おそらくこの書がはじめてである。それにつけても、「国語規範論の構想」以後、過程説の主唱者自身による技術論の具体化は、どのような形をとるものであろうか。あわせて出現を待ちたいところでもある。

光風出版の「話しことは新書」は、大石・森岡・上甲三氏の著書の刊行によって全六巻の完結を見た。——前年の末に出た大石氏の「話しコトバの性格」は、「話しことば」とは何を指すかを問う基礎工作にはじまり、音声言語の諸要素について、その性格・特色を解剖して行く。分量も相当のものだけに、豊富な内容を盛り、重厚な力作となった。高声言語の実態観察にかけてはなお類書少なく、この書など大いに存在意義を誇るべきもの。——森岡氏の「話しコトバの効果」は、パブリック・スピーキング系統の指導書の一つの典型とも見られるものであるが、はじめに「効果」についての行きとどいた記述があり、「効果」という語のもつニュアンスのためにパブリック・スピーキング全体に誤解があることを憂慮して、「効果」の真義を明らかにする配慮が見られる。——上甲氏の「話しコトバの練習」は、「朗読」の練習をもふくめ、話し方の基礎にあるべき標準音声（アタマメントをふくむ）の習得についても周到に筆を動かしたものの。「練習」とあるだけに、具体的な事例に富んで親切である。

なお、近藤国一氏の、多年の労作「話しことばの指導——日本

語をよくするために——」(牧書店)は、おそらく国語教育の部門でふれられるであろうが、地域社会における共通語指導の体験を通して言語生活改善の志向を明らかにしたものととして、ここにも並べ記しておきたい。

四

マス・コミュニケーションに関する分野でも、単行本の刊行が多かった。

まず、従来多くのマス・コミ論が、もっぱら「高姿勢」で「マス・コミの暴力」を説いて来たところへ、もう少し「低姿勢」で小ワワリのきくマス・コミ論があらわれた。例の「解き口」理論をひっさげた、加藤秀俊氏の「マス・コミュニケーション」(講談社ミリオンプックス)がそれである。氏は、あらためてマス・コミの「受信人」の問題をとりあげ、「マス・コミと個人とのかわり合いを個人の側からみる」という発想を展開する。そして、個人の「解き口」を決定する要因の重要なものとしてとりあげられて来るのが「小集団」である。

同氏の「ある家族のコミュニケーション生活」(マス・コミュニケーション)過程における小集団の問題——「思想」(二月号)というケース・スタディーは、従来の巨視的・演繹的なマス・コミ論に対して、微視的・帰納的な接近をはかろうとする氏の志向が、ひとつの具体化を見せたもの。

そのほかでは、マス・コミの用語に関するものがにぎやかだった。まず、古谷綱正氏の「新聞作法」(光文社カッパブックス)

は、穩健な見解を基礎にしながら、それでいて新鮮な魅力をたてる。著者自身の体験談を通して語られた「新聞文章概説」ともいべきもの。——宇野隆保氏の「新聞のことは」(宝文館)は新聞文章の平易化という問題に焦点をあわせ、豊富な資料にもとづいた、綿密な記述である。扇谷正造氏の「現代のマス・コミ」(春陽堂)にも、「読み易さ」の研究という、要を得た一文がふくまれている。

放送関係では、大西雅雄氏が大伏肇氏と協力しての労作「放送のことは」(東京堂)全三巻が相次いで出た。「1、コマーシャルメッセージ」「2、ニュース天気予報」「3、ラジオドラマ・朗読脚本」と分け、構成・用語修辭から、音声表現の実際にまでわたり、資料を豊富に集積してある。

講座中の一篇としては、宇野義方氏の「マス・コミュニケーション」とことば「(ことばの働き)」が、マス・コミにおける言語表現の位置やその性格を解明しつつ、ラジオと新聞との用語のちがいなどを分析した。マス・コミの言語の問題に関する総論的な記述として好適のものとなる。

そのほか、「新聞研究」「新聞学評論」「NHK放送文化」等の専門雑誌に、この方面の研究が相変らず現れたことはいうまでもない。

五

「言語生活」といえば、雑誌「言語生活」の名を忘れることはないが、この年度、同誌毎号の特集の中から、特に言語生活に密接なところをひろえば、

2月・女性の言語生活、7月・現代の敬語、8月・暮らしのことば、9月・これからの読み書き能力、

更に、前出、10月・言語技術の再検討……といったところか。——一々についてとりあげたい記事も少なくないが、すべて割愛せざるをえない。

一方、前年度、休刊を報じておいた話術ロータリー機関誌「ことば」が、この年度に入っても復刊しないままだったのは惜しい。

もう一つ惜しいことは、社内用資料といった類で、入手しがたい文献の中に、すぐれたものがいくつもあるらしいことである。

なお、展望を、活字になったものばかりに限ってきたが、もとより便宜によったことで、本意ではない。——多くの研究・教育機関、ことに一般人を対象とした啓蒙・指導機関の活動など、活潑なものが少なくなかったことはいうまでもない。大学の卒業論文題目なども、広い範囲にわたってくわしいことは知り得ないが、筆者の目にふれる範囲でも、//言語生活//と銘打つものが、ようやく数を増しつつある。

こうして、研究の頂点をいっそう高めることが期待される一方に、次第に底辺の広がりが増し、抜きがたい根が張られつつあることが感じられる。明年度の△言語生活▽展望が執筆されるとき、そこには、どのような、豊富な内容が盛り込まれるであろうか。

(東洋大学講師)